

450 パセドウ病の¹³¹I治療後のTSHレセプター抗体(TRAb)の変動

日下部きよ子、佐藤優美、中野敬子、牧正子、金谷和子、金谷信一、松本延介、小林秀樹 (東女医大 放)、
¹³¹I治療後の予後推定におけるTRAbの測定について検討した。1987年4月より1993年3月迄の6年間に¹³¹I治療を受け、1年以上経過が観察されている50例について、治療効果とTRAb値の変動との関係を観察評価した。¹³¹I治療後1-5年の間、正常機能を呈している正常群の治療前のTRAb値は、¹³¹I治療後も機能亢進症にて治療を要した亢進群や低下症に至った低下群に比し低値を示した。正常群のTRAbは¹³¹I治療後3-6ヶ月に治療前の3-4倍に上昇する大きな変動パターンを呈する例が多かった。¹³¹I治療前及び治療後のTRAbの経時的測定は予後の推定の指標になる可能性が示唆された。

451 エタノール注入療法(PEIT)による甲状腺機能亢進症の治療の試み

中駄邦博、加藤千恵次、鍾江香久子、伊藤和夫、古館正從 (北大核医学)

われわれは甲状腺腫瘍ではPEIT施行後にエタノール浸透範囲は病理学的に変性・壊死に陥る事を確認しているが、PEITの正常甲状腺に対する効果をラットで検討したところ、甲状腺体積の2倍量以上のエタノールを注入した個体で甲状腺がほぼ破壊される事が判明した。そこで、副作用のため抗甲状腺剤の使用が困難な甲状腺機能亢進症2例をPEITで治療した。予めInformed consentを得て無機ヨード剤を開始した後に右葉全体と左葉の下2/3に浸透するようエタノールを注入した。甲状腺機能は1例でPEIT2回施行後、もう1例で6回施行後に正常化し、その後も4~7ヶ月間euthyroidで経過中である。PEITは甲状腺機能廃絶法としても魅力的手段になる可能性がある。

452 Tl-201 SPECTによるパセドウ病患者の胸腺腫大の評価

河田 実 (公立南丹病院RI)、梶田芳弘、中嶋良行、儀間 充、藤田洋一 (同内科)、秋本和美 (同放射線)

パセドウ病に伴う胸腺腫大の病因的意義は不明である。今回パセドウ病(バ病)7例のTl-201 SPECTを行い、早期像及び後期像より胸腺腫大の評価を行った。機能亢進期の患者7例中6例に早期像で胸腺描画が陽性で、後期像での異常集積を認めた。その程度とCTでの胸腺サイズは相関しなかったが、SPECTでの胸腺描画陽性例は全例CTでも陽性であり、陰性例は陰性であった。正常者、非甲状腺疾患10例に同様の検討を行ったが、全例SPECTでの胸腺描画は陰性であった。2カ月の抗甲状腺剤治療後ではSPECT、CTの描画は不変で、手術例の2カ月後ではCT像は縮小した。以上バ病の胸腺評価法としてのTl-201 SPECTの有用性について報告する。

453 I-123甲状腺シンチグラフィー及びCTによるびまん性甲状腺疾患の診断の試み

今西好正、江原範重*, 下川光博*, 水谷和正, 川添修身, 作山彌子*, 藤川光弘, 弘瀬知江子**, 辻野大二郎**
聖マ医大東横病院(放), 同横浜市西部病院(放)*, (内科)**
びまん性甲状腺疾患の診断は臨床所見・生化学検査などに依るところが多い。今回 I-123甲状腺シンチグラフィーやCTの画像, その画像データ(I-123甲状腺摂取率, ヨウ素濃度など)によるびまん性甲状腺疾患の診断を試みたので報告する。対象は内科でびまん性甲状腺疾患と診断された93症例, 対照22症例, 計115症例(CT検査:130件, I-123甲状腺シンチグラフィー:53件)である。摂取率高値・ヨウ素濃度正常よりやや低値はGraves病; 摂取率正常又は高値・ヨウ素濃度やや低値不均一は腺腫様甲状腺腫; 体積大・ヨウ素濃度正常は単純性甲状腺腫などびまん性甲状腺疾患の診断に画像・画像データが役立つ可能性が高かった。

454 Tl-201甲状腺における連続反復回転 SPECTの試み -基礎的検討-

小野寺敦、有馬昭、奥山武雄 (船橋医療センター 放)
従来、Tl-201甲状腺でのステップ収集SPECTは、困難と考えられ、クリアランスがその理由の一つであった。しかし、脳血流や肝(GSA)などに使用されるダイナミックSPECT用連続反復回転収集が、当院のカメラ回転型装置にも導入されたため、これを、Tl-201甲状腺に利用し実用性を探る目的で、基礎的検討を行った。方法は、自作の動態用ファントムの検討及び、プラナーダイナミック+連続反復収集を臨床施行した。経時的評価は、投与量の制限・短時間収集などで、統計的雑音の原因となる低計数再構成を考慮しなければならない。しかし、局所の、リアルタイムでの断層像が得られ、アーチファクト軽減の加算SPECT像や、ウォッシュアウト過程を観察できた。よって、連続反復回転SPECTは有用と思われた。

455 甲状腺・副甲状腺腫瘍の造影MRI

中原 浩、野口志郎、村上信夫、原尾基継 (野口病院)
大西 隆、星 博昭、長町茂樹、陣之内正史、二見繁美、渡辺克司 (宮医大 放)

甲状腺・副甲状腺腫瘍における造影MRIについて検討した。(全例に早期相 Dynamic MRIを併用した。)対象は甲状腺乳頭癌25例、髄様癌10例、濾胞腺腫15例、悪性リンパ腫10例、慢性甲状腺炎13例、副甲状腺腺腫7例の80例である。各腫瘍はT2強調画像での信号はほぼ同様な高信号を呈しSE法のみでは鑑別難であったが、dynamic MRI、造影T1強調画像では乳頭癌、髄様癌、濾胞腺腫は強い造影効果を認める症例が多いのに対し、悪性リンパ腫、慢性甲状腺炎、副甲状腺腺腫では比較的造影効果は弱かった。良・悪性間で有意な差は得られなかったが、造影MRIは甲状腺・副甲状腺腫瘍の鑑別にある程度有用と考えられた。